

学位論文内容の要旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">武田（岡崎） 恵利</p> <p style="text-align: center;">【ライフサイエンス専攻専攻 平成25年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>無侵襲的出生前遺伝学的検査 (Noninvasive prenatal testing; NIPT)を受けた妊婦の産後メンタルストレスに対する認定遺伝カウンセラーの役割</p>	<p>妊娠・出産は、女性の心理状態に影響を与え、産褥期にはうつ病に伴う抑うつや不安などの精神障害が起こりやすい。その中でも産後うつ病は最も頻度の高い病型であり、リスク因子として、妊娠中の不安、高年妊娠、初産、多胎、妊娠前からの精神疾患の既往、親密なパートナーからの暴力、社会的サポートの欠如などが挙げられている。産後うつ病は、妊産婦の自殺も含め、母児に大きな影響をもたらし、早期発見・早期治療が重要であるため、周産期メンタルヘルスの重要性が強調されている。現在我が国では、出生前検査の実施数が増加しているが、無侵襲的出生前遺伝学的検査 (Noninvasive prenatal genetic testing; NIPT) をうけた妊婦では、抑うつや不安が高い傾向があると報告されている。そこで、NIPT をうけた妊婦の産後メンタルストレスに関する調査を行い、認定遺伝カウンセラーの役割について考察した。</p>
審査委員	<p>(主査) 教授 三宅 秀彦</p>	<p>最初に、NIPT を受けたカップルの背景について調査を行った。その結果、NIPT を受けたカップルは、妊婦が年長であり、妊婦の結婚年齢、初産年齢が高く、結婚から初産までの期間が長く、生殖補助医療(ART)を利用して妊娠した割合も高いことが示された。これらは、産後のメンタルストレスを上昇させる因子であり、さらに双胎妊娠の発生と関連する因子である。よって、今後、双胎妊娠での NIPT 希望者が増加することが予測された。また双胎妊娠は、妊娠中から産後にかけて医学的・心理社会的負担が大きくなる。しかしながら、NIPT における双胎妊娠でのデータは十分ではない。そこで、双胎妊娠における NIPT の精度と検査後の経過について調査した。その結果、双胎妊娠の NIPT は単胎妊娠と同程度の精度があることが明らかとなった。</p>
	<p>教授 菅原 ますみ</p>	<p>最後に NIPT を受けた女性を対象に、産後メンタルストレスが上昇した要因について調査を行ったところ、初産婦、ART(特に顕微授精)を利用した妊娠、低出生体重児の出産は、産後メンタルストレスを上昇させる要因であることが明らかとなった。また、一部の女性では、妊娠初期にあまりストレスを感じていなくても産後にメンタルストレスが上昇していた。</p>
	<p>教授 由良 敬</p>	<p>以上の結果から、産後メンタルストレスをもつ妊婦に対して、遺伝カウンセリングが拾い上げの場となりうることが示された。産後メンタルストレスに対して、多職種、多診療科を含めた社会全体での対応が必要であるが、認定遺伝カウンセラーの働きも重要であると考えられた。</p>
	<p>助教 四元 淳子</p>	
	<p>准教授 (東京医科大学医学研究科) 沼部 博直</p>	

